

[報告]

献血セミナーのカイゼン：戦略と戦術

熊本県赤十字血液センター

高村政志, 後藤善隆, 山田英二, 森山世津子, 大和康博, 井 清司

Kaizen of blood donation seminar at senior high school:
Strategy and tactics*Kumamoto Red Cross Blood Center*Seishi Takamura, Yoshitaka Goto, Eiji Yamada, Setsuko Moriyama, Yasuhiro Yamato
and Seishi I

抄 錄

献血セミナーと学校献血は若年層対策の重要な戦略である。熊本センターでは2012年度から高校での献血セミナーを推進し、セミナーでのアンケート結果等を参考にセミナーの内容を適宜改善している。最近のセミナーでは患者さんや家族の思いを伝えること、高校生による自発的な献血推進を促すこと、献血は安心社会のネットワークであることを強調している。2016年度の県内高校でのセミナーの実施は73校中20校(27.4%)で受講者数は5,028人となり、高校献血は2008年度の8校から2016年度は32校へ、10代の年代別献血率は2010年度に3.9%であったが2016年度は5.7%となった。また生徒自身による献血啓発活動もみられるようになった。

セミナーの戦術としては献血への理解と共感を促すほうが持続性のあるサポーターとなる可能性が高い。高校生による自発的な啓発活動は若者目線での推進として有効であり、今後もさまざまな支援をしていきたい。コンテンツ不足に悩む現場にとっても検討する価値があるとみられた。

Key words: blood donor recruitment, younger generation,
blood donation seminar, Kaizen

【緒 言】

献血制度の継続に若年層献血の推進が重要であり、その一環に献血セミナーがある。熊本センターでは医務課と推進課が協力してセミナーを開催しており、これまでのセミナーのカイゼンの成果を踏まえ今後の若年層対策の戦略と戦術について検討した。

【対象および方法】

熊本センターでは2012年度から高校での献血

セミナー開催に力を入れ、医務課と推進課が協同してセミナーを開催している。県庁の薬務衛生課または当センター推進課において高校からのセミナー申し込みを受け付け、推進課担当者が事前に学校側と日時等を打ち合わせる。冬期は時に同日にセミナーが重なることもあり、医務課は担当医師2名で対応している。セミナーの時間は授業時間の50分間が多いが要望に応じて柔軟に対応している(20分~90分間)。受講生徒は3年生が多いが全校生徒や希望者のみの場合もある。内容は

スライドを用いて血液や輸血に関する知識、献血の必要性や方法等を説明し、実際に輸血を受けた患者さんからの声を紹介している。開始直後の「つかみ」として約10分間の動画を用いており、学校からは「ありがとうっていっぱい言わせて」の視聴希望が多い。

セミナーでの工夫としては、献血に対する理解を促すとともに、「針を刺すのが痛くて嫌」といった献血への不安や恐怖心、「時間がかかりそう」など献血をしたことがない理由として常に上位にあげられる要因¹⁾について解説し理解を得られるようしている。セミナー終了後には毎回セミナーの感想や献血への関心等についてアンケートを実施して、その結果を参考に適宜内容を改善して次回以降のセミナーに活かすようにしている。

2015年にある公立高校で保健委員が行った生徒の献血への意識調査の中に、少数だが「献血で病気がうつる」、「献血は自分の利益にならない」、「献血で何か見返りはあるのか」といった意見があった。今回のセミナーの改善はこのアンケート結果をきっかけに行ったもので、献血は無償のボランティアであるという理念に基づいて、最近のセミナーでは以下の3点を強調している。

1. from I to C(図1)：献血は「ドナー→血液センター→患者」というアルファベットの「I」のような

一本の流れではなく命のバトンであり、血液センターは患者さんや家族からのメッセージをドナーに届けることであたかもアルファベットの「C」のように両者をつなぐ(Connecting)役割を果たす。セミナーでは患者さんや家族からの感謝のメッセージをできるだけ紹介するようにした。

2. Training of trainers：セミナーはセンター職員による生徒への直接的な働きかけだけでなく、生徒からの自発的な献血推進を促し支援する。県主催による県内高校の保健委員を対象にした研修会において献血セミナーを開催し、受講した保健委員がそれぞれの学校で独自にセミナーを行うように促した。従来のセミナーではセンター職員が講師として直接生徒に話をしていたが、いわば保健委員が講師の分身となってそれぞれの学校で献血の普及活動をしてもらった。

3. Change repeater to supporter：従来のセミナーでは処遇品の紹介や献血のメリットを強調していたが、改善後のセミナーでは献血は安心社会のネットワークであり皆で献血を支える意義を積極的に伝えるようにした。2016年4月の熊本地震後、県内で約1カ月にわたって全く献血が行われなかつたにもかかわらず、例年とほぼ同様の血液が供給されたが、これは全国からの支援があったからこそ可能だったことを紹介した(図2)。

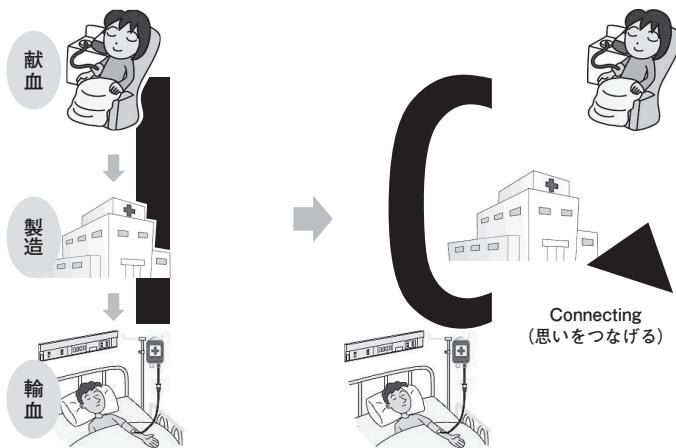


図1 from I to C

【結 果】

県内の高校での献血セミナーの実施は2011年度には1校のみであったが、開催の強化に取り組んだ2012年度以降は徐々に増加し、2016年度は県内73校中20校(27.4%)で実施し受講生徒数は5,028人だった(図3)。高校献血の実施は2008年度の8校を最低に2016年度は34校(高等専門学校2校を含む。)と順調に増えている。セミナー後のアンケート結果はおおむね好評で、2017年にある私立高校で3年生76人を対象に実施したアンケートでは、セミナー前には献血について関心

がある生徒は49.3%であったが、セミナー後には全生徒で献血の必要性への理解が良くなつたと回答した。

高校生の献血者数は2010年度までは年間約800人前後、配車台数8~9台で推移していたが、2011年度以降、配車台数が増えるにしたがつて高校献血の人数も増加し、2016年度には1,602人となっている(図4)。さらに2012年度から献血セミナーを強化したことで学校以外での献血者数も増えている。なお2016年度の高校以外での献血者数の減少は熊本地震によって県内2か所の献血

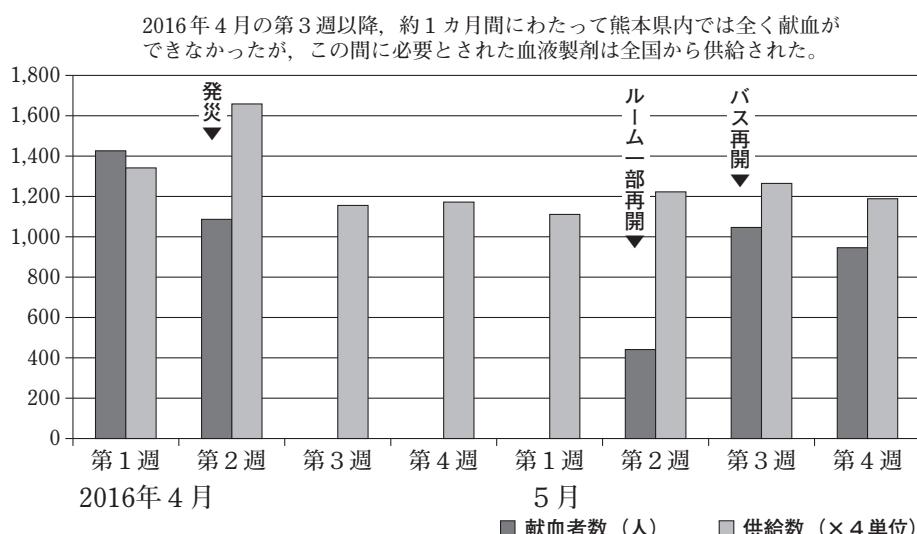


図2 熊本県における熊本地震発災前後の献血者数と供給数の週別変化

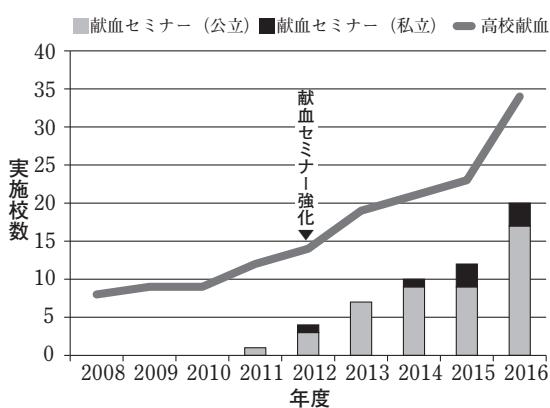


図3 熊本県の高校献血と献血セミナーの実績(73校中)

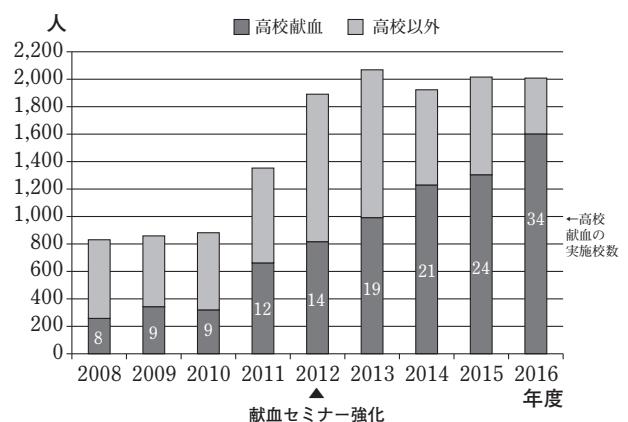


図4 熊本県における高校生の献血数の推移

血ルームがそれぞれ約1カ月間と約3カ月間にわたりて閉鎖された影響とみられた。

2016年度の生徒保健委員連絡協議会でのセミナー後、保健委員たちの活動はセミナーだけにとどまらず、学校献血での生徒への呼びかけ、缶バッジの作製などさまざまな広がりを見せた。保健委員による文化祭での献血の紹介が4校、献血紹介ビデオやマンガの自主製作が3校、NHK放送コンテストのテレビドキュメント部門への参加が1校あった。また保健委員から教師への献血セミナー開催の働きかけもあった。

高校献血や献血セミナーを強化してからの熊本

県内における2年ごとの年代別献血率の推移をみると、10代では2010年度に3.9%であったものが2016年度は5.7%と順調に増加している(図5)。2016年度には20代の年代別献血率5.3%を抜いて30代の5.7%に並んだ。20代、30代ではここ7年間一貫して減少傾向が続いているが、50代、60代は2014年度まではほぼ横ばいであったが、2016年度は熊本地震の影響で減少に転じている。

【考 察】

熊本県では2009年度をピークに献血者数の減少が続いているが、2016年度は熊本地震の影響で

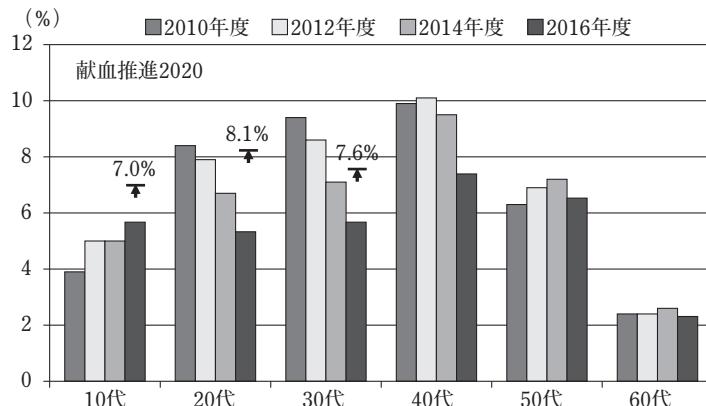


図5 熊本県の年代別献血率の推移(2年ごと)と献血推進2020の目標献血率

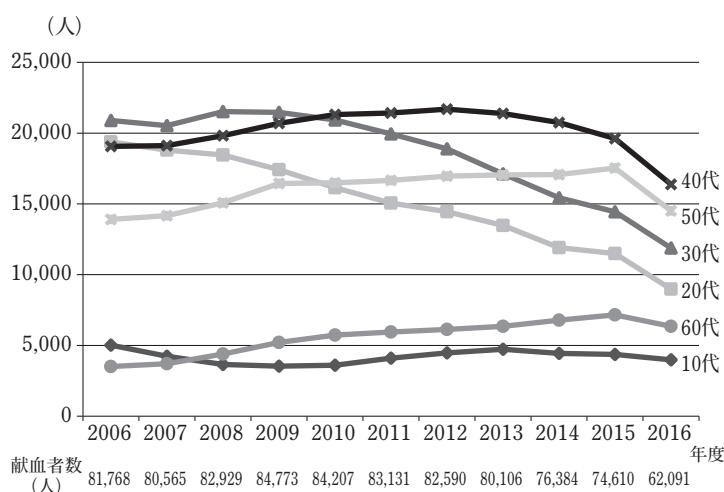


図6 熊本県の年代別献血者数の推移

62,901人、前年度比83.2%とさらに落ち込みが目立った(図6)。なかでも若年層献血の減少が著しく、若年人口の減少がその大きな要因の一つとなっている。しかし九州における2015年度の各歳別延べ献血者数(男性)をみると献血者数のピークは42歳と18歳の二峰性を示している(図7左)²⁾。さらに延べ献血者数と人口ピラミッド(全国、2015年、男性)³⁾における42歳から22歳への減少率を比較すると、前者は59.8%減で後者は40.7%減である(図7)。すなわち若年人口の減少以上にとりわけ20代での献血離れが際立っており、10代で初回献血を経験してもそれが必ずしも20代での献血につながっていない現状となっている。以前から40代における献血率の高さは高校時代の献血体験が好影響しており、高校での集団献血はその後の献血への動機付けとなることが指摘されている¹⁾。つまり10代をいかに多く初回献血者として取り込み、成人後も引き続き献血を続けてもらえるかが今後の長期にわたる献血者確保に決定的に重要な意味を持つと言える⁴⁾。

そのための戦略として第一にいかに10代の初回献血者数を上げるか、第二に初回献血を経験し

た10代をいかに複数回献血者にするか、第三に20代で献血から離れる献血者をいかに引き留めるかの三つの戦略が考えられる(図7左)。第二の複数回献血者の確保戦略として広報や各種キャンペーンがあげられる。20代での献血離れの要因としては就職によって新入社員には時間的な余裕がないことや非正規雇用の増加、出産や育児によって女性が献血から離れることがあげられる。これらに対する第三戦略として企業セミナーの実施や献血ルームの改善(キッズスペースや託児サービス等)があり、熊本センターでは2017年度以降4回の企業セミナーを実施した(12月末現在)。

できるだけ多くの若年層を初回献血へ導く第一戦略として高校献血と献血セミナーがある⁵⁾。高校献血は実際に生徒へ献血の機会を提供する場であり、献血セミナーは献血への理解を促す機会である。高校献血とセミナーは若年層対策の両輪であり、高校献血とセミナーは相互に有機的な運用が望ましい。実際セミナーの印象が強い間に高校献血を実施したほうが反応も確かで、おおむねセミナーの一週間後の実施が良いようである。遠隔地の場合は授業一限目にセミナーを行い、引き続

両者とも42歳をピークに若年になるほど減少しているが、その減少割合は献血者数においてより顕著である。

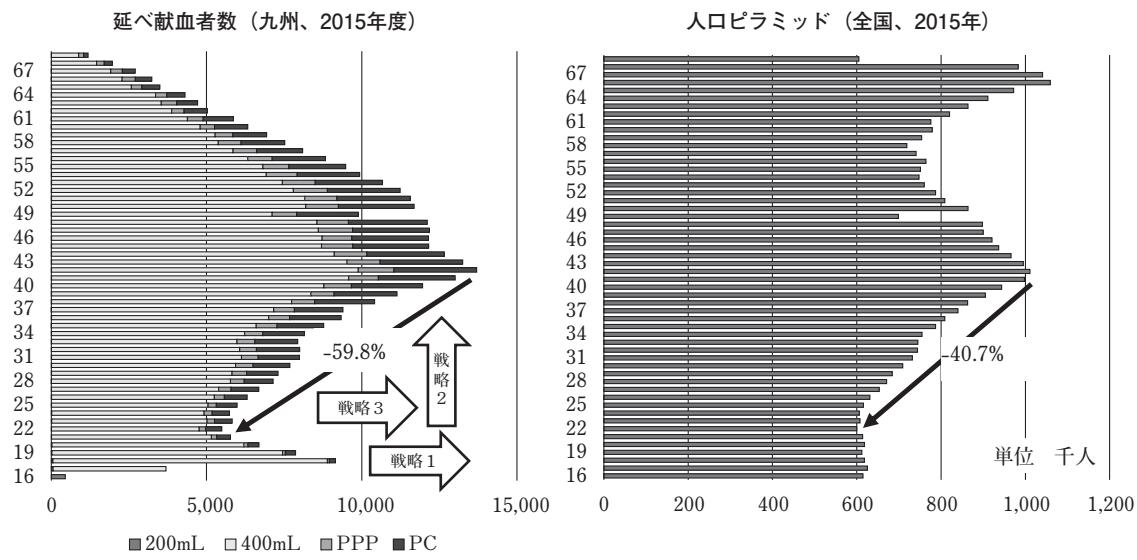


図7 年齢別延べ献血者数と年齢各歳別人口(男性)

いて献血を実施することもある。セミナーのみで配車できない高校もあるが、セミナーを開催すると開催当日に献血ルームを訪れる生徒もおり、献血ルームに近い高校ほどセミナーによる誘導効果は高い。実際に献血セミナー推進後は高校献血以外での献血者数も着実に増加している。しかし県内高校生の半数以上を占める熊本市内でのセミナーの実施率が低く(熊本市内5／27校、熊本市以外15／46校)、今後の課題となっている。高校献血の実施を学校が反対する理由として管理責任や授業に差し支えるという回答が寄せられており⁶⁾、献血セミナーについても授業への影響を指摘する意見が進学校を中心に聞かれるのも事実である。しかし文部科学省からの学習指導要領に献血制度について授業で触れるようにある通り⁷⁾、学校側には献血セミナーを命の「授業」の一環として捉えてもらうように開催を要請している。現在はライオンズクラブの人脈を活用した高校訪問を積極的に展開しており、セミナー開催や高校献血の実施に効果が得られている。

平成23年度の厚生労働省の調査では「針を刺すのが痛くて嫌だから」、「なんとなく不安だから」、「時間がかかりそうだから」、あるいは「近くに献血する場所や機会がなかったから」といったことが献血をしたことがない大きな理由としてあげられており¹⁾、我々が実施したアンケートでも同様の結果が得られている。保健委員が実施するアンケートでは建前ではない生徒の生の声が寄せられている。セミナーでは献血は「今だけ、金だけ、自分だけ」の3だけ主義からは対極にある崇高なボランティアであることをしっかりと説明するようしている。また献血の受益者である患者さんや家族の声を届けることは献血制度への共感を育む効果がある。セミナーの内容としては一時的な対策よりも献血への理解と共感を促す戦術のほうが持続的な献血サポーターとなる可能性が高いようである。

献血セミナーを推進課や採血課主体で行っているセンターも多いが、当センターのように医務課が関わる場合は高校側の要望に柔軟に対応できる利点がある。すなわち血液や輸血を必要とする疾

患について詳しくといった医学面での要望や生物の授業の延長として、あるいは看護学生に対してはある程度の臨床的な知識を求められる場合がある。また輸血を受けた患者さんや家族の声をリアルに伝えやすく質疑応答にもスムーズに対応できる。熊本県内の高校数は73校で今のところ医務課で対応できているが、今後さらに実施校が増えたり小中学校までセミナーの範囲を広げる際はセンター全体での対応が必要となる。

さらに高校生自身にセミナーの実施主体となってもらう戦術がある。学習定着率を表すLearning Pyramidによれば「講義」はわずか5%であるのに対し、「誰かに教えること」は90%と教育効果が極めて高い。保健委員を対象にした研修会を契機に、希望する生徒には献血ルームの見学、センターでの献血の一連の流れの説明、各種資料の提供などを通して自発的な啓発活動へとつなげている。実際に高校生による献血紹介の自主製作ビデオや文化祭でのパフォーマンスには刮目すべきものがあった。これら高校生自身による啓発活動(Learning by Doing)は自発的で持続的、かつ若者目線での多様性があり、今後もできるだけ支援をしていきたいと考えている。コンテンツ不足に悩む現場にとっても高校生を対象とした献血ビデオコンテストの開催などを通して、その有効利用を検討すべきではないだろうか。

熊本県においては10代の献血率は着実に上昇しているが、20代の献血率は依然低下傾向が続いている(図5)。10代への取り組みを始めて5年が経過し、開始当初の10代は20代へと移行している。10代の献血率上昇が持続するとともに、今後20代の献血率が上昇傾向へ転ずるのか期待を持って注視している。そのためにも献血セミナーのカイゼンと高校献血の実施という第一の戦略は継続しつつも、10代の献血者をいかに複数回献血者へと誘導するか(第二の戦略)と20代献血者の献血阻害要因をいかに除去するか(第三の戦略)が重要となってくる。今後は広報や企業セミナー、キッズスペースや託児環境の整備等の戦術をさらに検討する必要がある。

文 献

- 1) 厚生労働省ホームページ：平成23年度若年層献血意識調査結果報告書 <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000020ipe-att/2r98520000020j6a.pdf> (2018年1月現在)
- 2) 日本赤十字社九州ブロック血液センター 平成27年度事業年報 16-17, 2017
- 3) 総務省統計局ホームページ：総合統計書2-4年齢各歳別人口, <http://www.stat.go.jp/data/nihon/02.htm> (2018年1月現在)
- 4) 櫻井聰 ほか 初回献血者の対策～初回献血者をいかにリピーターにするか～ 血液事業 40 : 150-153, 2017
- 5) 竹下明裕 ほか 高校生の献血意識に関する調査 日本細胞治療学会誌 62 : 711-717, 2016
- 6) 厚生労働省ホームページ：若年層の献血者について (平成28年度報告) 日本赤十字社血液事業本部 http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinskyoku-Soumuka/0000146099_3.pdf (2018年1月現在)
- 7) 文部科学省ホームページ：高等学校学習指導要領解説 (保健体育編・体育編) http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1282000_7.pdf (2018年1月現在)